

延長戦の末、大和高田クを破って優勝し、抱き合って喜ぶ和歌山箕島球友会の選手たち—いずれもメットライフドームで9月4日、長谷川直亮撮影

全日本クラブ野球 2年ぶり優勝

県内唯一の社会人野球チームの和歌山箕島球友会が、西武プリンスドーム（埼玉県所沢市）で9月1〜4日にあった第42回全日本クラブ野球選手権大会で2年ぶりの4回目の優勝を果たし、クラブチーム日本一の座に返り咲いた。

【矢倉健次】

箕島球友会

「V字回復」と呼びたくなる 出場にもあと一歩に迫っていた。復活劇だった。箕島球友会は2006、13年に続き15年もクラブ選手権を制し、新調された優勝旗の初代保持チームとなった。

ところが昨年、気持ちの緩みがあったのか、連覇を目指したクラブ選手権は西近畿地区予選で2度敗れ、本大会出場を逃してしまふ。さらに今年の都市対抗は大阪・和歌山1次予選で敗

退し、近畿2次予選にも4年ぶりに進めなかった。投手陣にけがが多かったことなどが響いたが、西川忠宏監督（56）と選手たちは「支えてもらっている地元

に申し訳ない。このままでシーズンを終られない」との思いを強くしていた。幸い7月のクラブ選手権西近畿地区予選を前に、3年目の右腕・寺岡大輝投手と2年目の左腕・和田拓也投手の故障が癒え、チームを支える「二枚看板」の態勢が整った。打線も元阪神の穴田真規選手らが好調を維持して、危なげなく予選を勝ち抜き、

執念のV字回復



投打 がっちりかみ合う



大和高田ク戦で、延長タイブレーク十回裏1死満塁から、サヨナラの右前適時打を放つ和歌山箕島球友会の水田信一郎選手

7回目の本大会出場を決めた。下馬評はさほど高くなかったが、1回戦で打線が爆発して東北マークス（宮城）を20―3で降し、勢いに乗った。準々決勝は和田投手が5安打完封の好投を見せ、鹿兒島ドリームウェーブ（鹿兒島）に5―0で快勝。準決勝は寺岡投手が12奪三振の完投でゴールドジムク（東京）に2―1で競り勝った。

優勝して出場権を得た社会人野球日本選手権大会は5回目の出場。林尚希主将は「企業チーム相手に気持ちで負けないようにして、悲願の1勝を目指す」と力強く語っている。

次は日本選手権

た。2日連投の和田投手が九回まで無失点に抑えたものの打線が沈黙し、タイブレークの延長戦へ。十回表に2失点したが、その裏、穴田選手の執念の適時内野安打などで追いつき、好リードを続けてきた水田信一郎捕手がサヨナラ適時打。投打がかみ合った見事な戦いぶりだった。



全日本クラブ野球選手権大会で優勝し、笑顔で記念写真に納まる和歌山箕島球友会の選手たち